平城宮東院庭園「隅楼」の復原

平城宮東院庭園の東南隅で発見された掘立柱建物SB5880（いわゆる「隅楼」）は、従来、八角楼もしくは十字楼の遺構として理解されてきた。ところが、1997年の全面発掘調査によって、L字形の特殊な平面を呈することが明らかになり、上部構造の復原について根本的な見直しを迫られることになった（本書16·17頁参照）。

遺構の再検討　SB5880は11個の大型柱穴で構成される建物跡である。柱掘形はいずれも一辺が約２m、遺構検出面からの深さは約1.5mを測る。以下、平面の特徴を次頁左上図の番付に従って説明してみよう。

まず問題となるのが、ロ－３の柱穴である。ロ－３は平面が約70×100㎝、深さ約40㎝で、他に比べれば格段に小さい。これをSB5880と関連づけるならば、①礎石の据付痕跡、②床束の痕跡、という二つの可能性を想定できる。しかし、礎石の据付痕跡にしては穴が深すぎるし、深いわりには根石が残っていない。また、床束の痕跡ならば、ロ－２などの位置にも同種の痕跡が残るものと思われるが、これに類似する痕跡は他の位置においてまったく検出していない。以上から、ロ－３の小穴はSB5880にともなう遺構ではない、と判断した。

L字形平面の解釈　こうして平面をみなおすと、SB5880は単廊隅部分の平面とよく似ている。単廊隅と異なるのは、ハ－２の位置に柱がたつ点であり、この柱配置上の特徴が、「隅楼」の上部構造を大きく規定した可能性があるだろう。たとえば単廊の場合、入隅部分で隅行方向45度に虹梁をかけるのに対して、SB5880では、１・２・３・４すべての筋でイ～ハ間に虹梁をかけていた可能性が高い。この特異な柱配置は、入隅部分に楼閣を建てるための構造上の仕掛けであると同時に開放的な西面に正面性を与えるための工夫と思われる。

回廊隅と楼閣の複合性　さて、SB5880は柱掘形の規模がすこぶる大きく、その地業がはなはだ堅固なことから、楼閣建築と推定されてきた。ただし、一つ気になるのは、出土した柱根が平屋の「中央建物」よりも細く、断面の対辺間寸法が1.15尺程度しかとれないことである。ところが、平等院鳳凰堂翼廊（1053年建立）の初層柱径はこれとおなじ1.15尺であり、しかも鳳凰堂にとりつく南北方向の翼廊の柱間寸法は８尺等間であって、これもSB5880の桁行方向の柱間に等しい。鳳凰堂は翼廊そのものが重層で、その隅に小さな楼閣をたちあげ三層構造としているわけだから、SB5880が重層以上の楼閣であったとしても、なんら不思議ではない。

そもそも、回廊隅に楼閣をたちあげる建物は、平等院鳳凰堂だけでなく、日本および中国の古代宮殿・仏寺において、決して珍しいものではなかった。日本では、鳳凰堂来迎壁に翼廊の屈折部にたつ楼造の建物が描かれ、年中行事絵巻にも大極殿院回廊入隅部分の屋根に「蒼龍楼」を描いている。敦煌莫崗窟の浄土変相図に至っては、回廊の隅に楼閣をたてる仏殿図は数えあげればきりがなく、回廊の隅と楼閣はごく自然に複合化している。

SB5880の場合、それが宮城の隅に位置することも、楼閣のイメージと深く結びついている。中国では、宮城や都城の城壁隅に防御用の「角楼」を設けるのが一般的であった。北京故宮（紫禁城）の角楼などはその典型であり、平城宮東院のSB5880も、二条条間路からみた場合、２階部分が角楼のようなイメージで視野におさまっていたはずである。

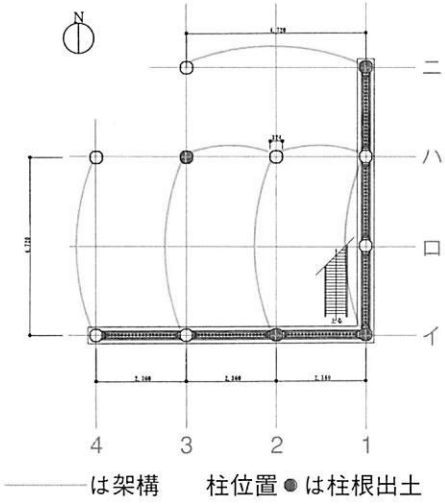
眺望施設としての楼閣　以上、回廊隅に似た平面、梁のかけ方、柱掘形における堅固な地業、平等院鳳凰堂翼廊との木割の近似、そして宮城隅の建物としてのイメージなどを総合的に判断し、SB5880は初層を単廊風の土間式通路とし、その隅部分を重層構造とする楼閣建築と推定した。初層は曲池周辺を回遊するさいの園路の定点であり、SB5880を通過するにあたっては、正面性の強い西側から入り、いくぶん閉鎖的な北側へ抜けた可能性が高い。一方、２階部分は庭および二条条間路から仰ぎみる空中の点景としてだけでなく、時によっては、貴人が階上に昇り、庭と都城の景観を眺める施設であった可能性を否定できない。

構造形式と細部　以上からSB5880の構造形式を、

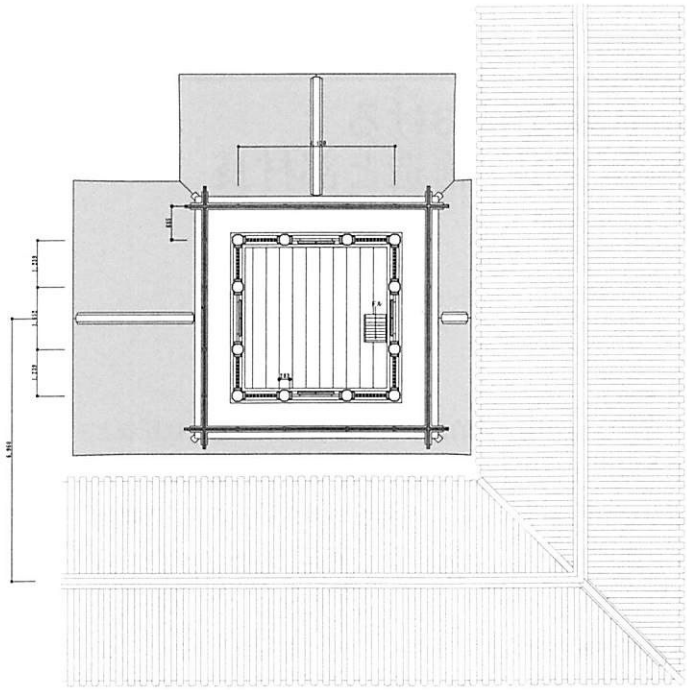
初層：桁行３間（24尺）、梁間２間（16尺）、北面折れ曲り桁行１間（8尺）、梁間２間（16尺）突出。切妻造、檜皮葺。

楼閣：桁行３間（14尺）、梁間３間（14尺）、宝形造、檜皮葺。

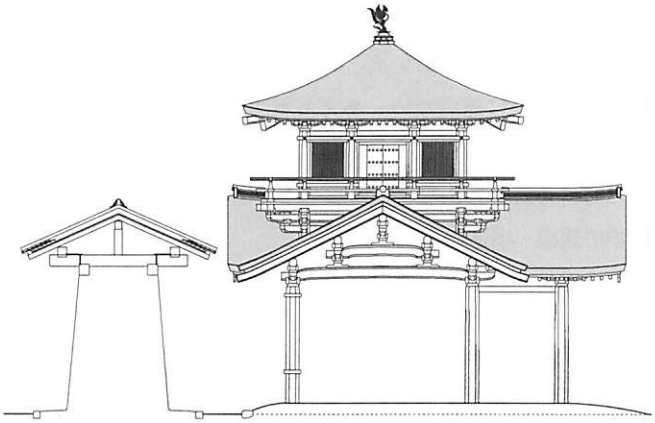
と考えた。本書17頁で示したように、八角柱については一種の面取とみなし、大斗・肘木・虹梁・丸桁・桁などにも面取を施す。各部材寸法の比例関係および面取の比率や形態は「中央建物」に準じる。なお、「中央建物」の



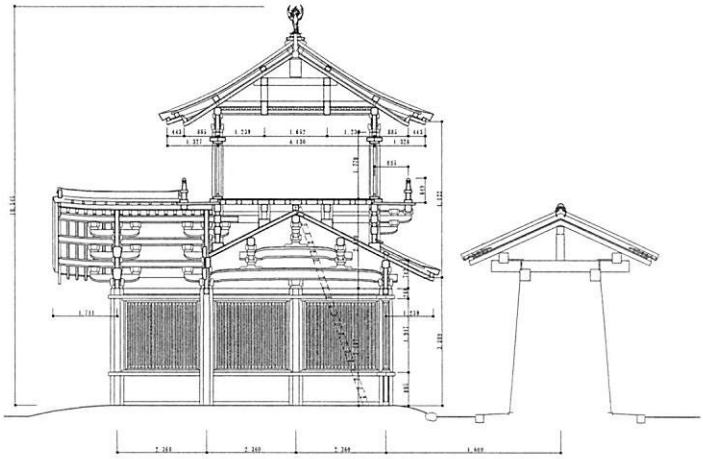
初層平面・番付・架構図　1：200



楼閣平面図　1：200



北立面図　1：200



南北断面図　1：200

木割の基準は法隆寺伝法堂前身建物であり、今回の復原木割も基本的にはこれに従う。屋根は奈良時代後半の瓦出土数が少なく、SB5880の柱抜取穴から檜皮が少量出土していることを重視し、檜皮葺とした。なお、SB5880の造営基準尺は1尺＝295mmに復原できる。

初層の構造　初層は3間×2間の切妻造東西棟を本体として、それに2間×1間の切妻造南北棟を附属させる建物と解釈した。柱間装置は単廊隅と似た平面を尊重し、大垣側の柱筋に腰壁付きの連子窓を設え、庭側を開放とする。柱の対辺間寸法は出土柱根の底部で340～350mmを測るので、地表面で1.15尺（339mm）、柱頭で1尺（295mm）とした。柱上の組物は平三斗で、架構は二重虹梁蟇股。軒まわりについては、単廊の一般例に倣って一軒角垂木とし、軒の出は大垣と雨落溝を共有するものとみて4.2尺に復原した。楼閣へ上るには、初層棟木と柱盤の間で垂木を数本はずし、そこに急勾配の梯子をかける。

楼閣の構造　楼閣の意匠と構造については、発掘資料から復原する手だてがないので、平等院鳳凰堂翼廊の隅部分に倣うことにした。平面は、鳳凰堂翼廊二階と楼閣の平面比から完数をとって一辺14尺の正方形（初層より2尺逓減）とし、各面3間に割って、宝形造檜皮葺の屋根をかけ、頂部に鳳凰をのせる。柱は初層東西棟の垂木上にわたした4条の柱盤の上にたてる。柱径は初層と楼閣の平面比から床レベルで0.96尺、柱頂部で0.9尺とした。柱間装置は四面とも中央間を扉、両脇間を連子窓とする。内部には床を張り、四周には縁をめぐらして組高欄を設える。柱上の組物は平三斗とし、小屋組を隠す組入天井を丸桁の高さに張る。軒は二軒とし、軒の出は4.5尺とする。また、縁の出は木負の出と合わせた。

（浅川滋男・箱崎和久・蓮沼麻衣子／平城宮跡発掘調査部）